大宰府アカデミー・令和編　第3講　令和5年6月21日（水）質問及び回答（Q＆A）

「白村江戦」
講師・回答：森　公章氏（東洋大学教授）

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

①磐瀬（行）宮・長津宮、朝倉橘広庭宮の所在地について

Q/　斉明天皇が征西のために筑紫に下った際に留まったとされる磐瀬（行）宮・長津宮の所在地はどこだと考えられていますか。また朝倉橘広庭宮はどこでしょうか。

A/　回答

磐瀬（行）宮・長津宮について、『日本書紀』によれば、斉明天皇一行は「娜大津」（博多）に着くと、まず「磐瀬行宮」に入ったとされ、斉明天皇はその名を「長津」と改めたとみえますから、この「磐瀬（行）宮」は、その後の『日本書紀』に登場する「長津宮」と同じ場所だと考えられます。この宮については、現在までのところ、その遺跡は発見されていませんが、その地名などから現在の西日本鉄道福岡天神大牟田線の高宮駅西側丘陵裾部に比定する説があります。

朝倉橘広庭宮は、古くはこれを土佐国に比定する説などもありました。近年では、現在の大宰府政庁の場所（発掘調査により検出された政庁Ⅰ－1 期）と考える説が呈されています。また地名の観点から、これを現在の朝倉地域に求める説も古くからあります。『日本書紀』によると、「朝倉社」（麻底良山山頂に鎮座する麻氐良布神社と考えられています）の近くに所在したと推定されることから、その候補地として朝倉市須川（旧朝倉町大字須川）、同市山田（旧朝倉町大字山田）、同市杷木志波（旧杷木町志波）の三地区があげられていましたが、1990 年代の九州横断道建設の際の発掘調査により、志波地区から大規模建物跡群が発見され、これらが朝倉橘広庭宮に関係する遺跡ではないか、とされ、朝倉地区の中では、この志波地区がもっとも有力と考えられています。

②倭国船の構造について

Q/　白村江戦に出陣した倭国船はどのような船だったのでしょうか。

A/　回答

まず、『日本書紀』によれば、唐側の船は「戦船（いくさぶね）」と記されています。いわゆる戦艦で、鉄板が張ってあり防御性に優れ、また櫓を設けて、そこから射かけるなどの攻撃が可能なように造られていました。一方、日本側のそれは、中国側の史料である『旧唐書』劉仁軌伝には、単に「舟」と書かれており、唐から見れば、小舟にすぎない貧弱な兵備であったと考えられます。その倭国船が具体的にどのような構造の船であったかは、よくわかりませんが、古墳から出土している船形埴輪などから推定すると、木製の丸木舟（刳船）に竪板（舷側板）を追加した、準構造船と呼ばれる様式の船だったのではないか、と考えられます。こうした点を踏まえて作成したのが、講義でも紹介しました白村江戦想像図です。この想像図は私が監修したもので、『再現イラストでよみがえる日本史の現場』（朝日新聞出版、2022 年）32～33 頁に収められています。

※　ご質問ありがとうございました。